

心理的な責任帰属欲求が決定論的行為への自由意志/責任帰属に与える影響

The Impact of Psychological Motivation on Free Will/Responsibility Attributions in Deterministic Situations

稲荷森 輝一[†], 晴木 祐助[†], 宮園 健吾[†]

Kiichi Inarimori, Yusuke Haruki, Kengo Miyazono

[†]北海道大学

Hokkaido University

inarimori.kiichi.y2@elms.hokudai.ac.jp

概要

自由意志の実験哲学における一部研究は、処罰欲求が決定論的行為に対する自由意志・道徳的責任の帰属を増大させる可能性を示唆している。本研究ではこの効果の因果関係を明らかにすることを主目的として新たな大規模なオンライン実験を設計し、低欲求条件と高欲求条件それぞれで二種類の非道徳的行為に対する責任帰属判断の質問紙調査を実施した。その結果、行為の種類の違いが処罰欲求と責任帰属判断それぞれに影響することが明らかとなった。

キーワード：実験哲学, 自由意志, 道徳心理学

1. イントロダクション

人間は道徳的責任に必要な自由意志をもつのだろうか？この問題をめぐり、哲学においては伝統的に決定論と自由意志の両立可能性が論じられてきた。決定論的世界では、人間の行為を含むあらゆる事象は、それらに先行する要因によって一意に決定される。たとえば物理的決定論によれば、この宇宙で起こるすべての出来事は、宇宙が始まったときの初期条件とそのとき存在する自然法則によって因果的に決定される。ゆえに、この宇宙で実際の事象と別の事象が起こることはあり得ない。あるいは、別様の事象が生じる可能性が存在するにせよ、人間の意志が宇宙の因果的来歴から独立に行為を引き起こすことはないと言われる。

決定論が正しいかどうかは経験的な問題であり、哲学者がアームチェアで解決できる問題ではないが、少なくとも哲学者は決定論と自由意志論との間の概念的整合性、あるいは非整合性を問題としてきた。こうした背景から、現代の自由意志論争では、人々が自由意志と決定論についてどのような直観をもつかが主要な論点の一つとなっている。より具体的には、人々は決定論と道徳的責任に必要な自由意志の両立可能性を認める「両立論的直観」を有するのか、それとも両者の両立可能性を認めない「非両立論的直観」を有するのか争点となってきた。

自由意志と直観をめぐる議論は長らく哲学者の直観に基づいて行われてきたが、近年「実験哲学」と呼ばれる方法論の発展に伴い、決定論と自由意志をめぐる一般人の直観についての経験的研究が大きな関心を集めている。いわゆる「自由意志の実験哲学」には、両立論を支持する研究もあれば非両立論を支持する研究もあり、いかなる要因が異なる研究結果を生み出しているのかについては議論が続いている。

本研究では、人々が決定論的行為に対して覚える自由意志・責任帰属直観について、それが両立論的（行為が因果的に決定されていても道徳的責任が生じる）あるいは非両立論的なのか、そしてどのような要因がその直観につながったのかを検討した。自由意志の実験哲学におけるこれまでの研究では、提示される行為の具体性が高まることで両立論的直観の増加することが知られているほか (Nichols & Knobe, 2007)、決定論的世界に関する誤解が人々の回答に影響することが指摘されている (Nahmias et al. 2010; 2014; Nedelhoffer et al. 2020)。しかしその他にも両立論的直観に寄与すると思われる要因はいくつかあり、とりわけ重要だと考えられるのは、人々が自由意志/責任を行為主体に帰属したいという心理的な欲求である。

なぜなら Clark et al. (2019) で論じられているように、処罰欲求が自由意志/責任帰属を増大させるというモデルは、Nichols and Knobe (2007)で明らかになった行為の具体性による効果をはじめ、先行研究で示されているいくつかの現象も説明できるという点で高い説明力を有するからだ。実際、Clark et al. (2014; 2019) における一連の実験は、自由意志および道徳的責任を帰属したいという動機が増大することによって、両立論的判断が増加するというモデルを支持している。

しかし、彼女らの研究にはいくつかの方法論的限界がある。一つには、彼女らの研究では参加者の欲求それ自体が直接測定されていない。ゆえに、自由意志/責任帰属に対する欲求の効果量は明らかでない。また、

実験デザイン上、処罰欲求が自由意志/責任帰属に影響する他の因子と独立にどれだけの効果をもつかを検証できていない。たとえば Clark et al. (2014) における二つ目の実験では、人々は道徳的に中立的な行為に比べて道徳的悪い行為に対してより強く自由意志を帰属することが示されている。こうした結果は処罰欲求が自由意志/責任帰属を増大させるという仮説を間接的に支持するものであるが、「行為の悪さ」という因子が条件間で変動している以上、自由意志の帰属が本当に処罰欲求に起因しているかは定かでない。以上の理由から、先行研究では処罰欲求がそれ自体として自由意志/責任帰属に影響する程度およびその心理的プロセスが十分明らかにされているとは言い難い。

したがって本研究では、自由意志の実験哲学における参加者の処罰欲求が自由意志/責任帰属に対してもつ効果量を直接測定することを目的として、処罰欲求を質問紙で直接測定した。同時に、さらに欲求を他の因子から独立に操作することによって、処罰欲求が決定論的行為への自由意志/責任帰属判断に与える影響をより明確にすることを試みた。

2. 行動実験

参加者：調査はオンラインで実施され、質問紙に含まれるアテンションチェックを通過した 824 人分のデータを解析対象とした（平均年齢=42.59±10.34 歳、女性が 357 人）。

具体的な手続きとしては、自由意志の実験哲学におけるヴィニエット型実験の一般的な手続きに沿い、実験参加者に決定論的世界の描写を読んでもらったのち、その決定論的世界における非道徳的行為を描写したストーリーを実験参加者に提示し、その行為が自由意志に基づくものか、そして行為者は道徳的責任を負うかをそれぞれ 7 件法で評価するよう求めた。そのあと、決定論的世界の理解と責任帰属欲求も合わせて測定した。本実験では人々の責任帰属欲求を実験的に操作するため、非道徳的行為の種類（殺人・脱税）とその行為の顛末（罰を受ける・受けない）を変更したストーリーを用いた。参加者は実験中で提示される行為の顛末に応じて高欲求条件（罰を受けない）と低欲求条件（罰を受ける）の二つに割り振られ、各条件で二つの行為について上述の質問に回答した。

3. 結果

まず初めに、人々の決定論的世界における責任帰属欲求が、行為の種類（殺人・脱税）と行為者の顛末（すでに罪を受けている・受けていない）という処罰欲求に関わるストーリーの違いによって変化するかを検証した。その結果、殺人行為は脱税行為よりも強く責任帰属欲求を喚起した一方で ($p < .001$, $\eta^2_p = .009$)、行為者の顛末による変化は確認されなかった ($p = .13$, $\eta^2_p = .001$)。このことは、決定論的世界における非道徳的行為の種類によって喚起される心理的な責任帰属欲求が変化する一方で、たとえその非道徳的な行為者が応報的な結末を迎えても、責任帰属欲求が大きく変化しないことを示している。すなわち個人の処罰欲求の実験的な操作について、可能な点と難しい点が明らかとなったといえる。

さらに主要な解析として、行為者の自由意志の有無とそれらに対する責任帰属欲求に関わる直観がどのように生じているか明らかにするため、行為の種類と行為者の顛末を主要因、決定論的世界の理解と処罰欲求の個人差を共変量とした共分散分析を行った。その結果、自由意志直観と責任帰属欲求のいずれにおいても決定論的世界の理解と処罰欲求は独立に高い説明力を持つことが明らかとなった（自由意志直観においては、決定論的世界の理解： $p < .001$, $\eta^2_p = .16$ ；責任帰属欲求： $p < .001$, $\eta^2_p = .04$ 、責任帰属欲求においては決定論的世界の理解： $p < .001$, $\eta^2_p = .16$ ；責任帰属欲求： $p < .001$, $\eta^2_p = .53$ ）。特に責任帰属欲求の判断においては、個人が持つ行為者への処罰欲求がかなり強く反映されていると考えられる。

4. 考察

現代哲学の主要トピックでは、ちょうど自然科学で観察データが証拠としての役割を果たすのと同様、意識的な推論を介さない判断である「直観」が理論を裏付けるデータとしての役割を担ってきた。人々の直観が両立論的であるか非両立論的であるかが自由意志をめぐる哲学的議論にとって重要な意味をもつためである。同様の理由から、そうした直観の産出プロセスも哲学的に重要である。たとえば、ある直観が哲学的真理とは無関係の要因に起因しているとなれば、その直観を根拠として特定の哲学理論を正当化することは難しくなる。

したがって、もし決定論的行為に対する自由意志/責

責任帰属直観の産出において処罰欲求が決定的に重要であるとするモデルが正しければ、両立論的直観に基づいて自由意志に関する両立論を正当化することには問題が伴う恐れがある。なぜならその場合、両立論的直観は私たちの責任帰属に関する基準を正確に反映していない可能性があるからだ。あるいは、Clark et al. (2019)も指摘しているように、人々の直観が欲求によって変化するものであるならば、そもそも一般人の直観が両立論的か非両立論的かを明らかにしようとする実験哲学的プロジェクトそれ自体が再考されるべき可能性がある。

今回の実験では、質問紙で測定された処罰欲求は決定論的行為への責任帰属に対して統計的に有意な効果を持つことが明らかとなった。同時に、脱税行為に対して殺人行為で有意に両立論的直観が増加したことに鑑みると、本研究の結果は、心理的な責任帰属欲求が増大することによって決定論的行為に対する責任帰属が増加すること、つまり、両立論的直観が処罰欲求に影響された結果として生じていることを示唆している。

しかし、本実験では行為の帰結に応じて設けられた二条件間で処罰欲求を操作することに失敗したため、処罰欲求が行為の悪さと独立に自由意志/責任帰属にどれだけ影響するかを明らかにすることはできなかった。それゆえ、殺人事例で両立論的直観が増大したことに関して言えば、純粋に行為の悪さが増大したこと起因しており、殺人事例で処罰欲求が増大したことに起因しているわけではない、と解釈する余地も残されている。したがって、今回の実験によって自由意志/責任帰属直観が産出される心理的プロセスにおける欲求の位置づけが確定されたと考えるのは性急である。哲学的議論に対して先述したような含意を導くためにはさらなる研究が必要である。

また、今回の実験では、多くの参加者が決定論を正しく理解することに失敗していた。実際、Nadelhoffer et al. (2021)の研究によれば、自由意志の実験哲学では参加者の大半が決定論を正しく理解することに失敗しており、方法論それ自体を見直すべきであるという見解が示されている。我々の実験もこうした見解を支持する結果を示している以上、今後の研究においてはコンプリヘンションエラーの問題について何らかの有効な対策を考案しなくてはならないだろう。

文献

- [1] Clark, C. J., Luguri, J. B., Ditto, P. H., Knobe, J., Shariff, A. F., & Baumeister, R. F. (2014). Free to punish: a motivated account of free will belief. *Journal of personality and social psychology*, 106(4), 501–513. <https://doi.org/10.1037/a0035880>
- [2] Clark, C. J., Winegard, B. M., & Baumeister, R. F. (2019). Forget the Folk: Moral Responsibility Preservation Motives and Other Conditions for Compatibilism. *Frontiers in Psychology*, 10. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2019.00215>
- [3] Murray, D. & Nahmias, E. (2014). Explaining Away Incompatibilist Intuitions. *Philosophy and Phenomenological Research* 88 (2):434-467. doi: <https://doi.org/10.1111/j.1933-1592.2012.00609.x>
- [4] Nadelhoffer, Thomas., Rose, David., Buckwalter, Wesley & Nichols, Shaun (2020). Natural Compatibilism, Indeterminism, and Intrusive Metaphysics. *Cognitive Science* 44 (8). doi: <https://doi.org/10.1111/cogs.12873>
- [5] Nadelhoffer, T., Murray, S., & Murry, E. (2021). Intuitions About Free Will and the Failure to Comprehend Determinism. *Erkenntnis*: 1-22. DOI: <https://doi.org/10.1007/s10670-021-00465-y>
- [6] Nahmias, E. ; Morris, S. ; Nadelhoffer, T. & Turner, J. (2005). Surveying Freedom: Folk Intuitions About Free Will and Moral Responsibility. *Philosophical Psychology* 18: 561-584. DOI: <https://doi.org/10.1080/09515080500264180>
- [7] Nahmias, E. ; Morris, S. ; Nadelhoffer, T. & Turner, J. (2006). Is Incompatibilism Intuitive? *Philosophy and Phenomenological Research* 73: 28-53. DOI: <https://doi.org/10.1111/j.1933-1592.2006.tb00603.x>
- [8] Nahmias, E. & Murray, D. (2010). Experimental Philosophy on Free Will: An Error Theory for Incompatibilist Intuitions. In Jesus Aguilar, Andrei Buckareff & Keith Frankish (eds.), *New Waves in Philosophy of Action*. Palgrave-Macmillan: pp. 189-215.
- [9] Nichols, S. & Knobe, J. (2007). Moral Responsibility and Determinism: The Cognitive Science of Folk Intuitions. *Noûs* 41 (4):663-685. doi: <https://doi.org/10.1111/j.1468-0068.2007.00666.x>